

# 菅茶山と北條霞亭

— 広島県深安郡神辺町について（2） —

片岡俊郎

## I

広島県深安郡神辺町が1992（平成4）年3月、第3次神辺町新長期総合計画を策定したことは、既に前稿で述べた（「広島県深安郡神辺町について — 地域開発論への一つの試み —」『福山大学経済学論集』第19巻第1号、1994年9月。以下、前稿とは本稿を指す）。

新長期総合計画は、町民へのアンケート調査、町役人へのヒヤリング、各種統計資料等に基づき策定されたものである。しかも、森鷗外「北條霞亭」で描かれた江戸時代の備後神辺が重なるから不思議である。

森鷗外（1862～1922年）の史伝「北條霞亭」（1917～1921年）によれば、伊勢的矢の人、北條霞亭（1780～1823年）は、縁あって菅茶山（1748～1827年）の下で、備後神辺に文化10（1813）年から文政4（1821）年まで8年間住むことになる。霞亭、34歳から42歳までである。その霞亭は、文政4（1821）年から、福山藩主阿部正精（1774～1826年）に召されて江戸に住み、わずか2年、44歳で没するのであるが。

霞亭が江戸に呼ばれた理由は、「一藩の風俗をも正しくし、学問と政事と相通じ、賞罰黜陟の権やはり学官の方に有之候様との思召之由」による。黜陟（ちゅっちょく）とは、黜は退（しりぞ）く、陟はあがるの意であり、功ある者は位を進め、功なき者は退けることである。しかも、福山藩主阿部正精は学官霞亭に対して「御紋服御袴にて御逢」いになったとのことである。福山藩主

阿部正精が霞亭を如何に高く評価していたかが伺えるエピソードでもある。

本稿は神辺町が生んだ教育者でもある江戸時代の漢詩人菅茶山研究であると共に、神辺町新長期総合計画を補完するものであることは論の展開の中で明らかにされるであろう。

なお、第3次神辺町新長期総合計画書は、「山と川のある都市<sup>まち</sup> かなべ——青壮老の共生空間——」をテーマに、「計画の前提」「基本構想」「基本計画」「付属資料」から構成されている。なかでも「基本計画」は「第I部、歴史文化都市“かなべ”の創造」「第II部、山と川を大切にすゝる自然環境都市の形成」「第III部、幼児から高齢者まで平等に楽しく暮らせるコミュニティ都市の形成」として取りまとめられており、本計画書の中心である。

ここでは、本稿には直接関係はないが、森鷗外「北條霞亭」によりながら、霞亭（1780～1823年）が菅茶山と相見するまでの注目すべき事柄を上げておくことにする。

文化8（1811）年、霞亭は、京都嵯峨で隠棲を始める。霞亭の京都での住居は、嵯峨の幽篁書屋、任有亭、梅陽軒を経て、京都市中の歳寒堂である。文化8（1811）年2月から文化10（1813）年3月、黄葉夕陽村舎に菅茶山を訪ねるまでである。

霞亭は、漢詩集『嵯峨樵歌』（文化9年）を刊行する。文化9（1812）年6月、父に寄せた手紙がある。

「嵯峨樵歌も近々出来上り申候。大方來月（七月）初旬迄には仕立候積りに御座候。此節雲州の道光上人御上京兼而頼遣置候備後福山神邊の老儒菅太仲先生の序文出来参り申候。御聞及も有之候哉、この太仲と被申候人は那波魯堂先生（原註、播州の人、寶曆の頃の大儒、京住）門人に而當時は三都にも肩をならべ候人なき程の詩人にて候。尤甚名高き人に御座候。樵歌序文甚おもしろく出来参り辱奉存候。右の道光上人と申は法華の高徳に而、詩も餘程出来候人に候。これも菅太仲など懇意の人に候。世間に而甚人の信用いたし候僧に御座候。」

(森鷗外『北條霞亭』，その五十七)

文化9 (1812) 年10月，霞亭が嵯峨樵歌刊行後，父に寄せた手紙である。

「此間日野殿より御所望有之一部遣申候。百々取次に而小生詩歌關白家へ上り候よし承り候。實は何も役に立たざる義に候へども，又しる人はしる事も可有之候。自愛仕候事に候。もとより詩文は小生の本志には無之，これは，只(ただなぐさみの)慰(たてまつ)仕業(しわざ)と存候。右等内情申上候得共，一切外人へ御尊被仰下間敷候。」(前掲書，その五十八)。なお，森鷗外「北條霞亭」の引用は，岩波版『鷗外全集，第十八卷』(1973年)によった。

## II

文化10 (1813) 年3月，霞亭は黄葉夕陽村舎を訪ね，菅茶山と初めて相見た。一旦，的矢に帰郷した霞亭の許もとに，茶山から廉塾への招聘の手紙が届く。

文化10 (1813) 年5月21日に，霞亭が弟碧山に与えた手紙である。

「小生並に山口君(凹巷)え御狀被下候。(按ずるに書は茶山の備後より伊勢に寄せたものである。)其儀は何分にも兩三年助力いたしもらひたきとの事に候，御狀別(おんめ)にかけ懸御目申候。御覽可被下候。身事におゐてはさまでの事も有之間敷候得共，あの通當時天下に高名の先生，別而四方の人輻湊(ふくそう)，歴々諸侯方の儒官の人にて入門在塾仕候程の人，實は二三日の會面に御心醉被致，この如く厚意に被仰聞候段，誠に學生之面目に存候。茶山の門人と申にてても無之，先々學風等はすこし違ひも候拙者を，重く敬待被致候儀，山口君とも申出し，近世にまれなる事，益(ますますもって)以茶山翁の高徳想ひやられ候。御存じの通，當時京江戸などの諸先生業におゐては茶山に及候者無之候得共，皆々傲然(ごうぜん)とかまへ候人多く候時節に候。この通り謙虚の思召，實に不堪感佩候。尤參り候はゞ後來の都下などへ發業いたし候基本にも可然と存候。夫に内々山口君とも御相談申候得共，山口君も美事可惜際會にも候得共，遠別もつらく被存，とかくいづれとも決斷いたし兼候。尤遠方とは申ながら江戸などとは大に相違に而，百

菅茶山と北條霞亭

里たらぬ所之上，通路も甚いたしやすき道，並に仕宦<sup>(しかん)</sup>などとは違ひ候而，一歳一度か又は不時に勢南歸省は出来候事に御座候故，案じ候には及不申候得共，何分御兩親（適齋夫妻）の意にまかせ候より外は無之候間，足下より得と御雙親様へ御相談可被下候。山口君も呉々<sup>(くれぐれ)</sup>被申候也。」（森鷗外『北條霞亭』，その六十四）

霞亭の茶山とのつながりは，茶山の弟子でもある伊勢山田詩社の代表的な詩人，山口凹巷<sup>おうこう</sup>（1772～1830年）の存在が大きいように思う。

文化10（1813）年8月，霞亭は，神辺で茶山を補佐することになる。鷗外は，次のように述べている。

「わたくしは此九月二十七日碧山宛の書より，先づ霞亭の状況<sup>まかてい じゃうきやう せう</sup>を抄する。『此方さして相替候儀も無之候。當時は塾中出入書生三十人許居申候。菅先生甚勉強いたされ候人に而，毎日講釋<sup>(けたいなく)</sup>等無懈怠有之候。小生も先日より毎朝講釋手傳ひはじめ候。大學中庸大方終り候。詩經近日にはじめ候。』廉塾<sup>れんじゅく き</sup>に来てより，九月二十七日に至る間に，幾多<sup>ぐわつ にち いた あひだ いくた にっし</sup>の日子があつたことは，學庸<sup>がくよう かう</sup>を講じ畢つたと云ふより推<sup>い</sup>すことが出来る。『此方に参り候より，府中行の外は一切他出も不仕，門外もしらぬ位に候。短日に候故，何歎といそがしく覺え候。』」（前掲書，その六十四）

文化10（1813）年，茶山が霞亭を迎えるに成功した心境は，次の詩から窺える。

孤生躡々鬢斑斑

好把斯身附等閑

幸得招君爲隱侶

將分一半讀書山

コセイ，ウウ，ビンハンハン

ヨシ，コノミヲトリテ，トウカンニフスルニ

サイワイニ，キミヲマネキテ，インリョタルヲウ

マサニ、イッパン、ドクショノヤマヲ、ワカタントス

—ひとり寂しく生きて、今、鬢に白髪を交える齡となった。この年になれば何の望みもなく、なおざりな生活を続けるのみである。ところが幸いにあなたを塾に招くことができ、ときに勉学することになり、読まないままに堆（うずたか）く積んでおいた書籍の山を二人で手分けして読む気にもなったのである。—（読み方と訳は、筑摩版、森鷗外全集第六卷(1959年)、『北條霞亭』、その六十五、梅谷文夫氏の語注によった。）

前記の漢詩は、「黄葉夕陽村舎詩、後編、卷之四」にあり、欄外に、北條霞亭の評語が附されている。

「承眷不淺、抱愧實深。ケンヲウクルコト、アサカラズ、ハヂライダクコト、マコトニフカシ」—茶山先生にいろいろとお引立ていただいているにもかかわらず、御期待にそえずまことにはずかしい。—（読み方と訳は、前掲書同所。同語注。）

文化11（1814）年2月、霞亭が、弟碧山に宛てた手紙の一部からは、神辺の風景が伝わってくる。

「尚々御雙親様始、時下御自愛專一奉祈候。今年は春色も甚はやく候。最早去年参り候節の園中の辛夷、昨日あたりより盛開に御坐候。なにかに付御床布奉存候。」（森鷗外『北條霞亭』、その六十九）

鷗外は、次のように言う。

「霞亭は前年癸酉三月に始て神邊に來て、黄葉夕陽村舎の園中に辛夷の花の盛に開いてゐるのを見た。暖氣の特に早く回つた甲戌には、二月の未だ盡きぬに辛夷の花が再び開いた。そして霞亭の足は將に赤繩子の纏るを免れざらむとしてゐる。」（前掲書、同所。）

梅谷文夫氏は、前掲書語注で、赤繩子について次のように記している。「唐の韋固が宋城で遇った異人。囊中に夫婦の縁を結ぶ赤い繩をもっていたのでこう呼ぶ。『続幽怪録』に『唐韋固少クシテ未ダ娶ラズ、宋城ニ旅次シテ異人ニ

遇フ、囊ニ倚リテ坐シ月下ニ向キテ書ヲ檢ス、固問フ、答ヘテ曰ク、天下ノ婚ハ因リテ囊中ノ赤繩子ニ問ヒテ云フ、此ヲ以テ夫妻の足ヲ繫グ、仇家異域ト雖ドモ、繩一ニテ之ヲ繫グ、終ニ易フルベカラズ、君ノ妻ハ乃チ此ノ店ノ北ニ菜ヲ売ル陣姫ノ女ナリ』とある。」（筑摩版、森鷗外全集第六卷）

文化12（1815）年4月19日、霞亭は、茶山の姪、敬（きょう）と結婚した。霞亭、35歳、敬、33歳、茶山の妹チヨの娘であり、敬は従兄と結婚したものの、夫は死去、その後の結婚である。敬と前夫との子菅三は、後に茶山の跡を嗣ぐことになる。前年2月、茶山より霞亭に打診した結着であった。

前年12月、霞亭が弟碧山に与えた手紙の一部である。

「先日京都へ袴上下頼置候而、歸路大坂迄相達し、持歸候へども、いづれも餘りけつかり過、直段（ねだん）はり候而迷惑仕候。上下は随分よろしく候へども、袴奥丹後とやらいふものに而木綿衣裳へ着用不似合、且はよき衣裳國がらかつこうよろしからず候。不苦候はゞ其許（碧山）御持之袴と御かへ可被下候。一兩二朱程もかかり候。屋敷便の節御遣可被下候。便次第此方よりも差出し可申候。」

（森鷗外『北條霞亭』，その七十三）

鷗外は袴にこだわり、文化12年3月5日に、霞亭が碧山に与えた手紙を引用しながら、次のように述べている。

「霞亭碧山の袴を更へむとする議は終に行はれた。『袴御遣被下辱存候。此方の袴今便差出し可申之處、大坂書林便荷はり候故差扣申候。跡より差上可申候。此方別段に又々一つこしらへ候。』碧山の神邊（さしひかえ）に送つたのは的矢じたての袴、霞亭の的矢へきざんに送らむとするのは京都じたての袴である。京都じたての華美を嫌つた霞亭も、的矢じたての粗野かんなべに過ぐるを見て、別に神邊じたての袴をみつらへたものと見える。」（前掲書，その七十八）

霞亭は「薇山三観」の端を、文化11（1814）年正月、三原観梅で開いた後、文化13年4月、山南観漁、同年5月、竹田観蛸で閉じる。鷗外は、霞亭の弟碧山に当てた6月6日付の短信によりながら、次のように述べている。

「しかし此この短たん信しん中ちゆうに却かへつて有いう用ようなる文字もんじがある。それは薇山びざん三觀くわんかんこく刊刻ことの事である。『此節京にて小生の薇山三觀詩上木仕候。大方七月中には出来可申候。浅井周旋被致候。しかし是は社中始、先々御無言に被成可被下候。尤土産（に）いたし候積り也。』三觀くわんかんぼんの刊本あさゐうちには浅井じよ氏の序あさゐうちがあつて、末に『文化丙子仲夏井毅達夫識』と署しよしてある。浅井あさゐうち氏、名は毅な字は達夫きあざな、通稱は十助たつぶであつたと見える」（前掲書、その九十三）

文化13（1816）年6月26日付けの霞亭が弟碧山に与えた手紙には、紅紙の詩箋せんが巻こき籠めてある。霞亭の神辺での日常生活が、かいまみられる。

思詩閑坐碧林隈

雨氣侵簾香始灰

幽鳥不知人熟視

苔花啄遍近階來

シヲオモイ、カンザス、ヘキリンノクマ

ウキハ、スダレヲオカシテ、シカイニオウ

ユウチョウ、ヒトノジュクシスルヲ、シラズ

タイカ、タクヘン、キンカイニキタル

— 詩句を案じて青葉の蔭にひとり居ると、雨の湿りが簾を通して部屋に流れこんで、たいていた香の灰が落ちる。何かしらぬ鳥が人がじっと見ているともしらず、苔の上に餌をさがしつえばみながら、次第に縁先に近づいてくる。

—（読み方と訳は、筑摩版、森鷗外全集第六卷、『北條霞亭』、その九十三、梅谷文夫氏の語注によった。）

同年の暮れには、次の詩がある。

抱志悠悠何所爲

光陰無待棄予馳

年年筋力成衰境

事事歡情異少時

千里故山抛弟妹  
一燈清酌對妻兒  
朝來聊有欣然意  
注了少陵全部詩

ココロザシヲイダキテ、ユウユウ、ナンスルトコロゾ  
コウイン、マツナク、ヨヲステテハス  
ネンネンノキンリョク、スイキョウヲ、ナス  
ジジ、カンジョウ、ショウジトコトナリ  
センリコザン、テイマイヲ、ナゲウツ  
イットウ、セイシャク、サイジニタイス  
チョウライ、イササカ、キンゼンノイアリ  
チュウリョウス、ショウリョウ、ゼンブノシ

— 志を抱いてなお暇をもてあそぶのはどうしたことか。月日は待つことなく自分をすてて去ってしまう。年々筋力も衰え、ときどきの歓情も少年の時とはちがってきた。遠い故郷に弟妹を置き去りにし、今夜、妻兒と酒を飲んだ。実は朝からいささか喜ばしいことがあるのである。杜甫の詩の全注釈が完了したのだ。—（読み方と訳は、筑摩版、森鷗外全集第六卷、『北條霞亭』、その百一、梅谷文夫氏の語注によった。）

同年の茶山については、霞亭が弟碧山に与えた手紙で知ることができる。「此方茶山翁來春二月七十壽辰、同伯母（原註、翁妻）も六十一に御座候。夫妻とも賀年にあたり候。（中略）。翁とかくすぐれ不申候へども、對客講釋はたえず有之候。」（森鷗外『北條霞亭』、その百一）

文化14(1817)年、茶山は古稀を迎える。

東風吹老老梅林  
元日今年春已深  
澗道沙乾白如雪



屠蘇醉裡好行吟

トウフウ，スイロウノ，ロウバイリン  
ガンジツ，コトシハル，ステニフカシ  
カンドウ，スナカワキテ，ユキヨリモシロシ  
トソ，スイリ，コウギンスルニヨシ

— 古びた梅林を歩いていると東風が老いた身を吹きすぎる。今年は元日から春はもう深い。谷川の道は砂が乾いて雪よりも白い。屠蘇機嫌であるきながら詩を吟ずるのもなかなかよいものだ。—（訳は、筑摩版、森鷗外全集第六巻、『北條霞亭』、その百二、梅谷文夫氏の語注によった。）

「七十誕辰」の詩がある。

醉月迷花七十年  
不能翻幸老林泉  
人稱隱侶兼吟侶  
身愧頑僊又病僊  
壯志非無才素短  
童心仍有事多愆  
展觀壽頌堆牀上  
且喜諸公未我捐

ツキニヨイ，ハナニマヨウ，ナナジュウネン  
フノウ，カエッテサイワイトス，リンセンニオウルヲ  
ヒトハシヨウス，インリョ，カネテギンリョト  
ミハハズ，ガンセン，マタビョウセン  
ソウシ，ナキニアラズ，サイモトミジカシ  
ドウシン，ナオアリ，コトアヤマリオオシ  
ジュショウヲ，テンカンシ，ショウジョウニウズタカシ  
カツヨロコブ，ショコウ，イマダワレヲステザルヲ

— 月や花といった自然を友に生きてここに七十年，無能の故かえってそれが幸いして林泉の中で年を重ねた。世間の人には隠侶だ，やれ吟侶だと色々に言うてくれるが，自分としてはかたくなな上に病気がちな変り者であることを愧じている。若い頃は大望を抱かなかったわけでは無いが，天性才能不足であり，今もって童心が去らぬのであやまりも多い。それにもかかわらず此の度の古稀を祝して諸公からもらった賀詞が牀上に堆く，それをひとつひとつ展げて見ていると，これでもまだ世間の人々が自分をすてないことは嬉しい限りだ。—  
(訳は，島谷真三，北川勇『茶山詩五百首 — 黄葉夕陽村舎詩抄解 —』児島書店，昭和50年によった。)

同年の霞亭については，8月朔（ついたち），霞亭が弟碧山に与えた手紙で知ることができる。

「今年は暑中は各別にも無之候へども，残暑の方却而甚しく候。」「田舎に僻在いたし候ては，世上の事などきくが甚おもしろく一樂事に相成候ものに御坐候。」（森鷗外『北條霞亭』，その百六）

文政元（1818）年，神辺に疫痢（えきり）が流行する。霞亭が，弟碧山に与えた7月6日の手紙である。

「此地五月末より疫病流行いたし候。小兒など多くいたみ候。等閑に存罷在候處，八日（六月八日）より少女お梅やみ付候而，段々重り候而，醫療等は手を盡し候得共，未三歳之小兒體もちかね，それにさしこみつよく，終に六月十一日午時はかなく相成申候。大分愛嬌らしくなり，物などもいひ候處，可憐事いたし候。<sup>（なにかと）</sup>葬送何歟仕上等いたし候内，十三日より又々小生やみ付候而，小生は餘程重症に而，晝夜大凡百行餘に及候事二三日に候。醫家も三四人の配劑に候。<sup>（さんか）</sup>三箇角兵衛殿始終療治に預り候。時疫を兼候症とて熱をさばき候事を第一に被致候。夫故か二十日頃よりは段々快き方に相赴候而，二三日前より大方平常に相成申候。併病後の事故，萬事廢却いたし，唯養生のみにかゝり候。最早氣遣は少しも有之間敷醫家も皆々被申候。<sup>（ぞんじよらざる）</sup>不存寄大病相煩候。大に迷惑仕候。

しかし最早食事等も味よろしく候。此分にては日々平復可仕候。必々二尊御案  
 じなきやう被仰可被下候。小兒の事は天命無是非候。近隣にても十二三人死去  
 いたし候位の事故、時節と存じ候。」（森鷗外『北條霞亭』，その百十五）

続いて、次の詩が添えられている。

幾回勵志體元孱  
 多少傷心伏枕間  
 千里相關老親意  
 一眠猶見病兒顔  
 風驚後夜燈殘壁  
 蟲咽幽叢秋滿山  
 蟬翼繭絲何所況  
 曉鐘聲裏淚潺湲

イクカイ、ココロザシヲハゲマスモ、カラダモトヨリヨワシ、  
 タショウノショウシン、チンカンニフス  
 センリ、アイカカワル、ロウシンノイ  
 イチミン、ナオミルゴトシ、ビョウジノカオ  
 フウキョウ、コウヤ、トモシビカベニノコル  
 チュウエン、ユウソウ、アキヤマニミツ  
 センヨク、ケンシ、ナンゾクラブルトコロゾヤ  
 ギョウショウ、セイリ、ナミダセンカンタリ

—娘を失って消沈している心を何度も奮いおこすが、元来弱い体なので、この傷心をこらえることができず病臥してしまった。千里離れていても親の心は子にとどくというが、眠ればきつと病み衰えた娘の顔が夢にあらわれる。夜ふけに風が出て燈火のゆらめきが壁にうつり、虫の声は草むらの蔭よりきこえて秋気は山に満ちている。薄幸な娘のことを思えばはてしがたい。とうとう一夜を明かして暁の鐘の鳴るのをきくと、涙がとめどもなく溢れでてきた。—

(読み方と訳は、筑摩版、森鷗外全集第六巻、『北條霞亭』，その百十五，梅谷文夫氏の語注によった。)

文政2（1819）年，霞亭は，福山藩に召され，福山弘道館にて，月二回ほど講義を受持つことになる。

霞亭には，次の詩がある。

吾遊半海内

梅花稱西備

會觀三原林

天下謂無二

讀君月瀨詩

舌橋驚絶異

或意詩人巧

誇言頗放肆

不然勝如許

豈無人標識

信疑交横胸

思想存夢寐

一見欲得實

今春杖履試

ワガユウハ，カイダイニナカバス

バイカ，セイビヲショウス

カツテ，ミハラノハヤシヲミテ

テンカ，ムニトイウ

キミガツキガセノシヲヨミテ

ゼツキョウ，ゼツイニオドロキ

アルイハオモウ，シジンノコウ

コゲン、スコブルハウシト  
 シカラズ、カチテユルスゴトシ  
 アニヒト、ヒョウシキナカラシヤ  
 シンギコモゴモ、ムネニヨコタワル  
 シソウ、ムビニソソズ  
 イッケンシテ、ジツヲエントス  
 コンシュン、ツエヲヒキテココロム

—わたしの遊歴は日本の半ばに及んでいるが未だ月瀬を訪ねたことはなく、梅は備後がよいと世に云われていて、かつて三原の梅林を訪ねたときもこれにまさる名勝は他にあるまいと考えたので、君の月瀬の詩を読んだときは舌があがってしばらくは信じることができなかった。一方では詩人が技巧をこらして誇張した表現をしたとおもい、他方では凹巷ともあろうものがそのようなことをする筈がなく、たしかに詩の通りの梅林があるのだとおもい、半信半疑で、夢にもそのことを思いみるありさまで、何とか一度その地に行つて真実を見きわめたいと考えていた。今春、機会を得て月瀬に行った。—（読み方と訳は、筑摩版、森鷗外全集第六巻、『北條霞亭』、その百二十五、梅谷文夫氏の語注によつた。）

霞亭の視野が、江戸、京、故郷的矢から、月瀬に及び、三原梅林は相対化され、備後地方が日本全国の中に正しく位置づけられることになる。同年の広瀬淡窓（1782～1856年）を嘆賞している詩を併せ考えれば、年上年下の違いはあるが、菅茶山と広瀬淡窓、神辺の廉塾と日田の咸宜園も同一の視野に収められているように思え、一層その感を深くするのである。

文政3（1820）年、霞亭、元旦の詩である。

不羨朝韓趁曉天  
 瓶梅香裏聽鷄眠  
 誰言今日是初老

自賦閑居已十年

チョウイ，ギョウテンヲハシルヲ，ウラヤマズ

ヘイバイ，コウリ，ケイミンヲキク

タレカイウ，コンニチ，コレショロウト

ミズカラ，カンキョヲフシテ，スデニジュウネンナリ

— 元日の朝の輝きが暁の空を染めていくのをさほどうれしくは思わない。瓶にいた梅の香を夢うつつにかぎながら鶏のつげるときを床の中できいた。今朝から私は初老になったと誰がいうものか。私が閑居の詩を賦して隠棲したのは十年前のことだもの。—（読み方と訳は、筑摩版、森鷗外全集第六巻、『北條霞亭』，その百三十，梅谷文夫氏の語注によった。）

小堀桂一郎氏は「元旦の詩に空しく初老を迎へたといふ嘆きの言葉が見えてゐる。たしかに霞亭は学業に於ても文筆に於ても，まだ何ほどのことも成し遂げてゐない。」と，述べている。（『森鷗外 — 文業解題（創作篇）』，岩波書店，1982年）

霞亭は，同年の七夕に詩を賦している。

倒翻書籠撲蟬魚

渫治井泉勞僕夫

一掬晚涼生徑草

半鉤新月在庭梧

年光容易不相待

兒女團樂聊可樂

還苦渠農妨著睡

問星指漢挽吾鬚

ショロクヲ，トウホンシ，タンギョヲウツ

セイセンヲ，セッチシテ，ボクフヲイタワル

イッキクノバンリョウ，ケイソウ，ショウズ

ハンコウノシンゲツ，テイゴニアリ  
 ネンコウ，ヨウイニ，アイマタズ  
 ジジョトダンランシ，イササカ，タノシムベシ  
 タマタマ，クキョシ，ワガネムリニツクヲサマタグ  
 ホシヲトイ，カンヲユビサシ，ワガヒゲヲヒク

— 書物箱をさかさまにして掃除し，紙魚（しみ）を退治し，井戸を渌らい，そのあと下僕をねぎらった。今夜はほんのちょっとではあるが涼をもよおして，庭の小径には雑草が芽を出している。鉤（かぎ）のような細い月は庭の梧桐の上に昇った。歳月はたちまち過ぎて，自分の思うように待ってはくれない。だが妻や子と団欒するときは老いたことも忘れて楽しい。ときどきは子供らに眠りをじゃまされて，星の名や天の河の説明をさせられたり，鬚をひっぱられることもあるのである。—（読み方と訳は，筑摩版，森鷗外全集第六巻，『北條霞亭』，その百三十五，梅谷文夫氏の語注によった。）

備後神辺，満天の星の下，家族団欒は，ほほえましい。

文政4（1821）年4月13日，霞亭は，藩主阿部正精に，江戸に召される。5月10日，神辺を出立し，6月2日，江戸に到着した。6月13日，大目附格儒官兼奥詰を命ぜられる。

鷗外をして「<sup>しも ぜんぶん の</sup>下に全文を載せる。事出處進退に關して<sup>ことしゅっしょんたい くわん</sup>甚重要であるから，これを<sup>せつりやく</sup>節略することを<sup>ほつ</sup>欲せぬのである。」といわしめた，弟碧山に，このことを報じた手紙は，次のようである。

「當十日御物頭交代便，大坂藏屋敷迄書狀差出し申候。大暑中<sup>(いよいよ)</sup>愈御安泰可被遊御揃欣喜之至奉存候。私無事<sup>(しからば)</sup>滯留仕候。然者當十三日（六月十三日）御館へ御召出し，大目附中より申渡し有之，三十人扶持被下置，大目附格に被仰附，儒官相勤候様との事に候。尚又奥詰相兼，月並御前講釋等申上候様被仰出候。其後家老中列坐御逢，御請申上，即刻御前（阿部正精）御目見被仰付候。難有次第に御坐候。其日御前は御登城より御歸り御休息の處，御小姓頭より申上候

は御疲にも被爲入候へば、御平服御逢被遊候様申上候處、いや初而逢事故、  
道に對してもと被仰、御紋服御袴に而御逢、兼々ききつたへ候、此度は大儀に  
存ずると御挨拶有之、其儘退出仕候。不肖之(かやう)一分箇様に御用之儀、いくへにも  
任にたへ不申義と、御前内意有之候節(もうさざるぎ)（六月十日）一旦御斷も申上候へども、  
是非にと之事にて右之仰付に及候。これらわづかの御扶持にも候得共、太中翁  
は五十近き時三人扶持被下、其後五人扶持になり、江戸在番十七年前にいたし  
候節十人扶持になり、この六年前在番御用之節二十人扶持に相成、夫に格式も(それ)  
上下格給人に而、大目附とは七八段も下に御坐候。右等のかつこう、高名學  
術太中翁にいくらか減少いたし候私故、色々と御内意御請思惟もいたし候。何  
分此度は御上之御主意有之、家中一統の風俗をも正し、學問と政事と相通じ候  
様との御主意の由、（太田又太郎傳宣）誠に難有思召に御坐候。當御屋敷儒官  
御國江戸かけ候而六七人も御坐候。夫に皆々私格式よりははるかにひくき候。  
家中にては大目附以上は貴官にて、下坐格と申候て、御門出入に御門番足輕總  
下坐いたし候。扱末々如何被命候哉、先在番と申事に候。在番なれば來年此頃  
迄の滞留に候。（後略）。」（森鷗外『北條霞亭』その百四十三）

霞亭は、8月8日、在番ではなく、江戸表引越の命を受ける。8月25日、江戸を発し、9月23日、福山に着いた。10月5日、妻敬、娘虎を伴い、備後を出発、11月13日、江戸藩邸に入った。

霞亭は、翌々年8月17日、江戸で没する。霞亭の神辺での生活は、丸8年に及んだのである。

### III

第3次神辺町新長期総合計画は、「山と川のある都市 まち かなべ——青壮老の共生空間——」をメインテーマに、「第I部、歴史文化都市“かなべ”の創造」「第II部、山と川を大切に自然環境都市の形成」「第III部、幼児から高齢者まで平等に楽しく暮らせるコミュニティ都市の形成」から構成されて



いることは既に述べた。

山と川は、単なる山と川の存在に対してではなく、丘陵地に散在している原始時代の古墳群、中世の山城神辺城、高屋川沿いに建立された古代の備後国分寺、隆盛を極めた近世の神辺本陣、まさに「歴史文化都市“かんなべ”」を象徴しているのである。したがって、「山と川を大切に自然環境都市」の形成は、歴史の大きな流れの中での必然的帰結といえる。

青壯老の共生空間に関しては、森鷗外「北條霞亭」によれば、霞亭が41歳を迎えた元旦の詩で、初老を空しく嘆きながらも、同年の七夕の詩で、満天の星の下での妻や子供との団欒の中に、老いを忘れる楽しさを詠んでいる。「幼児から高齢者まで平等に楽しく暮らせるコミュニティ都市の形成」には、神辺町の山の緑、川の青、澄んだ空が、欠かせないのである。

神辺町が生んだ江戸時代の漢詩人、菅茶山が好んで詠んだ山と川と日常生活は、伊勢的矢の人、北條霞亭を重ねることにより、備後神辺のもつ恵まれた風土をさらに際立たせることになる。

また、「山と川のある都市<sup>まち</sup>かんなべ」は神辺町に存在する単なる山と川を取り上げただけではない。山と川は山脈軸、河川軸として、軸と流れを明確にした神辺町都市づくりの象徴としての山と川でもある。神辺町は、中央部を流れる高屋川沿いに東西に平坦地が延び、南北は丘陵地である。町面積の約2分の1を占める山地に関しては、治山対策を必要とする。

高屋川は、備後福山の母なる1級河川芦田川の支川である。神辺町域の高屋川には、西から新川、加茂川、六間川、六反田川、箱田川、深水川、堂々川、狭間川、竹田川等が合流している。しかも、神辺町の河川は、いずれも河川幅が狭く、上流からの土砂の堆積によるいわゆる天井川を形成しているものが多い。したがって、総合的な治山・治水対策は必要不可欠である。

河川に関しては、治水対策にとどまることなく、神辺町が水不足に苦しまないためには、生活用水、農業用水、工業用水等の利水対策を推進する必要がある。

る。さらに、河川事業推進にあたっては、治水・利水機能に注目するだけでなく、潤いのある美しい水系環境の実現を図る親水の推進も、また必要となる。河川水質環境の整備改善、水辺の創生・河川軸を活かしたプロムナードの整備、生態系の保護等が、具体的施策である。

さらに、IIで問題にした文政2（1819）年、北條霞亭が広瀬淡窓を嘆賞している詩とは、次の2首である。

林鳥何好聲

拭几焚雞舌

西州有隱君

高臥抱清節

誦詩想其人

襟懷瑩冰雪

リンチョウ，ナンゾコウセイ

ツクエヲヌグイテ，ケイゼツヲタク

セイシュウ，インクンアリ

コウガ，セイセツヲイダク

シヲショウシテ，ソノヒトヲオモウ

キンカイ，ヒョウセツヲテラス

—今日は林で鳥が美しい声をして啼いている。机を拭って心静かに鶏舌香を焚いた。九州には隠れた詩人がいて、世を避けて身を高く持ち、心を清く保っている。その詩を読んでその人柄をおもりに、温い心の持主で世の冰雪を照らすごとく思われる。—

近詩日輕浮

競巧在脣舌

多君眞性情

仰舉陶靖節

吟來塵想消

一點紅爐雪

キンシ、ヒニケイフナリ

コウヲキソイテ、シンゼツアリ

キミ、シンノセイジョウオオシ

アオギテ、トウセイセツヲヨヅ

ギンライ、ジンソウキユ

イッテン、コウロノユキ

— 近頃の詩は日を追うて軽佻浮薄になり、技巧を競って口先だけの詩句を弄している。しかし、あなたは真に詩人としての素質を有し、陶靖節（陶淵明）を師と仰ぎ、その境地に到ろうとしている。その詩句は清新で俗詩人の手垢にまみれたものはなく、詩の真髓を悟るところがあると思われる。—

（以上2首の読み方と訳は、筑摩版、森鷗外全集第六巻、『北條霞亭』、その百二十九、梅谷文夫氏の語注によった。）

備後神辺に廉塾を、豊後日田に咸宜園を開いた、菅茶山と広瀬淡窓、神辺町の都市づくりも両者の人柄から学ぶことは多い。

なお、広瀬淡窓（1782～1856）は、『コンサイス日本人名事典、改訂新版』（三省堂、1993年）に、次のように記されている。（一部、抄出）

「頼山陽・梁川星巖・帆足万里・田能村竹田ら交友も広く、門人に高野長英・大村益次郎・谷口藍田・羽倉簡堂ら多くの人材を輩出した。淡窓は古今和漢の書に通じ、折衷学派として実証的であった。門生の指導に当っては厳格で敬天をむねとしたが、新古の学にこだわらず、偏することなく才能を伸ばす方針をとった。問題提示、答案、採点の順序でする試験は彼に始まるといわれる。」

第3次神辺町新長期総合計画の「第Ⅲ部、幼児から高齢者まで平等に楽しく暮らせるコミュニティ都市の形成」は、「第1章、教育の振興」「第2章、同和対策の推進」「第3章、福祉・保健・医療の推進」から構成されている。

「第3章、福祉・保健・医療の推進」については次のようにいえる。森鷗外「北條霞亭」によれば、文政元（1818）年、神辺に疫痢<sup>えきり</sup>が流行し、霞亭の娘、梅が3歳で死去するのみではなく、霞亭も罹病<sup>りびょう</sup>、大変苦しむことになる。しかも近隣で12,3人の死者を出す。

神辺町には、町立病院が存在する。神辺町における原因別死亡状況の上位5位を、長期総合計画は、次のように示している。

平成元（1989）年は、1位、悪性新生物、2位、脳血管疾患、3位、心臓疾患、4位、肺炎・気管支炎、同4位、老衰である。平成2（1990）年は、1位、脳血管疾患、2位、心臓疾患、3位、悪性新生物、4位、肺炎・気管支炎、5位、呼吸不全、同5位、腎不全である。平成3（1991）年は、悪性新生物、心臓疾患、脳血管疾患、肺炎・気管支炎、肝硬変の順である。

死因の上位3位、悪性新生物（いわゆる癌）、心臓疾患、脳血管疾患については、広域医療で対応せざるをえない。平成元年、4位の老衰が、平成2年、7位、平成3年、7位と順位が低下傾向にあることは気にかかる。また、平成6（1994）年度の国民医療費推計が1人当たり20万6千円は異常である。したがって、神辺町町立病院の役割は、神辺町が福祉・保健・医療を一体と考える中心でなければならない。神辺町町民の福祉・保健・医療に対する意識向上と行政対応の核となる意味である。

また、「第1章、教育の振興」については次のようである。森鷗外「北條霞亭」で、霞亭を媒介にして菅茶山、広瀬淡窓の人柄に言及したが、彼等の依って立つ漢籍は、現代の教育においては中心たりえない。日野龍夫氏は毎日新聞の「私の・選んだ・文庫・ベスト3」で中国文学者吉川幸次郎『漢文の話』を次のように紹介している。

「『漢文の話』は、その漢文の性格や歴史を解説した書である。漢文訓読は、日本人を中国の書物に近づけるために考え出された、きわめてすぐれた方法であるが、中国語の古典文を、漢文訓読体という日本語の文章の一種として扱っ

てしまうため、それが本来は外国語であるという認識をあいまいにして、中国文学の真面目をそこなり点がある。この書は、中国語の古典文の、日本式に訓読すると失われるさまざまな特質を懇切に解説して、訓読にはどういふ不十分さがあるかを考えさせてくれる。」（1994年5月9日）

現代の教育は、外国文献の理解型から、現実に諸々の問題を見つけ出し、分析し、解答を出す、いわゆる解決型へ移行しつつあるからである。

森鷗外「北條霞亭」により、文化13（1816）年、翌文化14（1817）年の霞亭、茶山の詩が、備後神辺ののどかな自然環境を謡い、一方では、志を抱き、身を立てる場所としては、備後神辺は田舎であり、退屈で物足りないことを詠じていることは、既に述べた。

備後神辺の地で、茶山、霞亭の両者が、外国文献の漢籍を教材にして学ぶことと、活かすことの矛盾を感じていたことには注目を要する。

福山大学は、1995年度の就職ガイダンスを前年10月から本格的に開始した。就職に必要な条件として、①バイタリティがあること、②適応力があり協調性に富むこと、③創造性、あるいは創意工夫に満ちていること、④対人折衝力を備えていること、⑤バランス感覚に優れていることをあげ、学生に5条件を身に着けるよう求めている。大学での学問は、教室で学ぶだけではなく、社会で活かす方法を考えねばならないことを強調しているといえる。教員がつけた成績の「優」の数ではなく、前記5条件を身に着け得たか否かを、自身で判断することの方が重要なのである。

中国新聞は、1994年度ノーベル経済学賞、米独のナッシュ、ゼルテン、ハーサニ3学者を、次のように紹介している。

「授賞理由によると、3人は現在の経済分析で大きな役割を果たしているゲームの理論の深化・発展で大きな功績があったとしている。

ゲームの理論は、フォン・ノイマン著の『ゲームの理論と経済活動』で初めて提唱された。これはチェスやポーカーなどゲームの戦略を経済分析に応用し

たもので、多国間協議や企業行動などで相手の出方、戦略を予想するのに有効とされている。

ナッシュ博士は、参加者の非協力を前提とした新たな分野で同理論を発展させた。セルテン教授は、ナッシュ博士が発展させた理論に動学的要素を持ち込み、ハーサニ教授は、参加者の情報が不十分という前提の下で同理論を発展させた。」（1994年10月12日）

経済学そのものが、大きな変わり目にあることは、前記受賞理由からも窺える。社会に役立つという観点から、経済学研究の先端を常に視野に入れつつ、福山大学では、学生の教育に全力が注がれているのである。

第3次神辺町新長期総合計画の「第II部、山と川を大切に自然環境都市の形成」は、「第1章、都市骨格の形成」「第2章、生活環境の整備」から構成されている。

「第2章、生活環境の整備」については次のようである。森鷗外「北條霞亭」によれば、霞亭は、文化11（1814）年正月の三原観梅、文化13（1816）年4月の山南観漁、同年5月の竹田観螢を「<sup>びざん</sup>薇山三観」としてまとめている。

三原市は、市花に梅、さつきを制定しているものの、市歌に取り上げられているのは、さつきだけである。霞亭が後年、友人<sup>おうこう</sup>凹巷に知らされ感嘆した<sup>つきがせ</sup>月瀬が、観光梅林としても現在に残っていることとは対照的である。

山南観漁は、福山市の観光鯛網、沼隈郡内海町の観光定置網に受け継がれている。

昭和33（1958）年、竹田の源氏螢およびその発生地として、深安郡神辺町下竹田、<sup>はざま</sup>狭間川流域が広島県の天然記念物に指定され、竹田観螢は、<sup>なごり</sup>名残を微かにとどめている。

神辺町に隣接する福山市駅家町服部地区で、螢の里づくりに取り組む自然を守る会の「まちづくりフォーラム I N服部」が、1994年10月15、16の両日、服部公民館であったことを報じる次の記事には、広域的視点での環境問題の扱い

として注目したい。（前半は省略。）

「16日朝は同守る会のメンバーらが6月上旬から育てたホタルの幼虫約5千匹を服部川に放流した後、同公民館でホタルの研究に取り組んでいる横須賀市自然博物館学芸員の大場信義さんが『ほたると豊かな環境の創造』と題して講演。『ホタルは水辺ばかりでなく、畑や森など潤いのある環境に生息する。ホタルは私たちの身近な環境を見る指標』などと話した。」（『山陽新聞』，1994年10月18日）

「第1章，都市骨格の形成」について，中国新聞は，神辺町が合併40周年を迎え，1994年10月30日に記念式典を開くに際し，山積する課題の中に，次のことをあげている。

「急激な人口増に生活基盤の整備が追い付かず，元年に始まった公共下水道の普及率は5.8%と県平均41%を大幅に下回る。中国地方の1級河川の汚濁ワースト1の芦田川水系で，特に汚れが目立つ高屋川に生活雑排水などが流れ込む。道路改良率も39.1%で県平均の44.3%を下回る。」（1994年10月28日）

第3次神辺町新長期総合計画の「第I部，歴史文化都市“かんなべ”の創造」は，「第1章，“かんなべらしさ”の創造」「第2章，産業振興」から構成されている。「第2章，産業振興」については次のようである。森鷗外「北條霞亭」は，文化11（1814）年，文化12（1815）年，霞亭が弟碧山に与えた手紙をあげ，霞亭が，京都じたての袴はかまと的矢じたての袴とを比較して，神辺じたての袴をあつらえざるを得なかったことを記している。霞亭は，華美，粗野を嫌ったからである。

菅波哲郎氏は，神辺が“織物の町”と称された歴史的背景を次のように述べている。

「元げんな和5年（1619）水野勝成みずのかつなりの居城となったが，元和8年水野氏の福山への移城によって，神辺城とその城下は機能を喪失した。しかし，その後は山陽道の宿駅として発展し，同道を上下する通行者の土産物として神辺縞が盛んに生産

された。

明治27年私設鉄道山陽線の開通により、山陽道の交通の要衝としての繁栄は終わりを告げ、神辺縞を基盤とした織物・染色が主要な産業となった。」（渡辺則文・北川建次監修『広島県風土記』旺文社、1986年）

森鷗外が指摘した霞亭が気に入った神辺仕立ての袴を、観光土産と神辺縞との関係から、観光と産業振興の産物として理解すれば、現代における観光は、少なくとも産業振興と結びつけて考えなければならないことになる。

神辺町は、工業（製造業）において、繊維工業、繊維製品製造業の町から、新たに造成した神辺工業団地を中心に、印刷業・電子部品製造業等新規産業の立地促進に努め、工業の多角化を目指している。

商業においては、新たな大規模小売店舗の進出を受け入れ、神辺町商業力の弱さを克服せんと取り組みつつある。

しかし、観光・レクリエーションについては多数の観光資源も十分活用されているとはいえない。農業の振興、林業の振興も同様であるが、観光・レクリエーションの振興は、観光資源のネットワーク化で満足するのではなく、第3次神辺町新長期総合計画「第Ⅲ部、幼児から高齢者まで平等に楽しく暮らせるコミュニティ都市の形成」「第Ⅱ部、山と川を大切に自然環境都市の形成」「第Ⅰ部、歴史文化都市“かんなべ”の創造」の視点から振興策を考えるべきであろう。神辺町の財政基盤確保のためにも、観光は見直されなければならないのである。

第3次神辺町新長期総合計画の「第Ⅰ部、歴史文化都市“かんなべ”の創造」は、「第1章、“かんなべらしさ”の創造」「第2章、産業の振興」から構成されていることは既に述べた。ここでは、「第1章“かんなべらしさ”の創造」の「第1節、文化の創造」「第2節、アメニティ（快適な環境）づくりの推進」「第3節、インテリジェント行政の推進」に言及したい。

森鷗外は「北條霞亭」において、文化11（1814）年、霞亭が弟碧山に与えた



手紙で、<sup>こぶし</sup>辛夷が盛んに開いている様子を知らせていることに注目し、前年、霞亭が、神辺を初めて訪れた時に咲いていた辛夷の花と重ねて、神辺の変わらぬ自然風景を描き出している。

菅茶山が、杜甫の影響を強く受けていたといわれていることについては、前稿ですでに述べた。杜甫が、「春望」の中で詠う「『国破れて』とは、国家の機構が解体して、ぼろぼろになってしまったことをいう。しかし、山河大地は、そうした人間の不幸に超然として、そのまま存在する。城郭にかこまれた町々に、春はことしもめぐり来た。人間はその秩序を失っても、自然はあくまでもその秩序を失わない。」と詠っていることを吉川幸次郎氏によりながら前稿で紹介もした。

したがって、長期総合計画でいう「なだらかな平野に広がる美しい田園風景、町を見下ろせる古城跡、江戸時代の面影を今に残す街並み、水辺と遊歩道を持つ堂々公園など数多くのアメニティ資源があり、これらを整備し活用していくことが、個性ある快適な環境づくりや地域活性化につながる。」（前記、第1章、「第2節、アメニティ（快適な環境）づくりの推進」）という指摘には耳を傾け、早期実現するよう努めなければならない。

その際、「多種多様にわたる町民の要求に対しては、行政の活動範囲の見直しを行い、『行政と町民との役割分担』を明確にするとともに、民間による提供が適切であると判断されるサービスについては、実情にあわせて民間委託や民間活力の導入を検討することが望まれる。」（前記、第1章「第3節、インテリジェント行政の推進」）は、十分考慮されるべきである。前記、第1章「第1節、文化の創造」を生み出す基盤だからである。

森鷗外「北條霞亭」によれば、霞亭は、文化10（1813）年3月、備後神辺の黄葉夕陽村舎に、菅茶山を訪ね、同年8月、廉塾の塾頭を務めることになる。また、鷗外は、老茶山が、若き霞亭を迎えて、学問、生活に活気を取り戻す様子を、茶山の詩をあげながら記している。

杜甫が「春望」の中で、人間は秩序を失うことがあっても、自然は、秩序を失わないと詠っていることは、既に確認した。

しかし、自然も人間とは無関係でないことを、杜甫は続けて「時世のありさまに悲しみを感じて、花も心をいためるのであろうか。涙をこぼすように、はらはらと散る。また人人がちりぢりになってしまった不安な空気の中では、鳥のなき声も、何となく不安げである。」と、詠っていることも前稿で紹介した。

神辺の変わらぬ自然風景が、霞亭を迎えて、老茶山に新鮮さをもって甦<sup>よみがえ</sup>ってきたであろうことは、十分想像できる。第3次神辺町新長期総合計画が、審議会委員として、前稿でも述べたように、福山大学から町外在住の尾島勝、渡部尚史、私の3名を加え、神辺町町民と共に作成されたことは「“かななべらしき”の創造」に新たな地平を切り拓く端緒といえるかも知れない。

霞亭が、備後神辺に住んだのは、文化10（1813）年から、文政4（1821）年まで、足掛け9年である。

私は、鷗外とは逆に、文政4年から文化10年へと遡り、霞亭と茶山の事跡と第3次神辺町新長期総合計画とを結びつけ、全体、第Ⅲ部、第Ⅱ部、第Ⅰ部との関係を順次論じてきた。

第3次神辺町新長期総合計画のメインテーマ「山と川のある都市<sup>まち</sup> かななべ——青壮老の共生空間——」は、過去と現在が重ね合わされたものであり、第3次神辺町新長期総合計画の「神辺町のゾーニング構想図」と「歴史文化都市づくりプロジェクトイメージ図」「美しい川づくりプロジェクトイメージ図」「福祉・保健・医療機能強化プロジェクトイメージ図」を念頭に置いただけでも、将来の神辺町を十分見通したものといえるであろう。第2次神辺町新長期総合計画の多数の図面でも目立った、山と川の存在が、本計画において表に躍り出たことになる。計画の継続性でもある。

## IV

森鷗外「北條霞亭」は、霞亭の江戸での生活を次のように記している。小堀桂一郎氏によりながら紹介する。

「文政5年（1822，43歳），江戸永住と決つたため，丸山に阿部家の地所を拝領して居宅の新築をはかる。幕臣で詩人の岡本花亭との交際が頻繁になる。六月末に新居が落成して入居した。七月病氣にかかり，霞亭は脚氣と思つてみた。以後遂に恢復することがない，死に至る病であつた。『小學纂註』の刊本が出来，霞亭はこれを知人に頒ち，また賣捌のことをたのんだ。松平定信にも一部を獻呈した。古賀精里の子穀堂が幕藩體制下での文教の衰頹を嘆き，霞亭にはかつて文會を起さうとした。一種の整風運動である。儒學者としての霞亭の存在が漸く公けに認められるやうになつた氣配である。しかし自身の健康は思はしくない。脚氣に喘息が加はり，なほりにくいことを嘆くばかりである。

文政6年（1823，44歳），病臥のまま正月を迎へた。脚氣と『痰喘』のために讀書・執筆を一時諦めて靜養に専念しようと思ふ。鷗外はこのころの霞亭に『萎縮腎』の徴候を見てゐる。（そしてこの推定を記してから十箇月足らずのうちに，鷗外自身の肉體にもこの萎縮腎の徴候が現れることになる。）病氣にも拘らず，霞亭と，蘭軒，花亭，穀堂，田内月堂，狩谷掖齋等との間に交際が繁くなり，短時日の間に親交を深めていつた跡が窺ひ見られる。六月半ば霞亭の弟碧山と良助とが兄の見舞のために不意に江戸に出てきた。八月初めの霞亭の一書簡は遂に全身衰弱の症候があらはれたことを推定させてゐる。八月十七日に霞亭は死んだ。」（『森鷗外——文業解題（創作篇）』，岩波書店，1982年）

霞亭の學問が「整風運動」を引起したにしても，殖産興業と結びついた実學とはいえない。神辺町民が，霞亭から今まで学ぼうとしてきたことは，『廉塾の塾頭，北條霞亭とその交友（神辺の歴史と文化，第8号）』（神辺郷土史研究会，1981年）からも窺える。しかし，神辺町の現代の都市<sup>まち</sup>づくりにおいては，

社会経済情勢の変化と結びつけた長期総合計画の視点からの「霞亭読み」を必要とする。

丸谷才一氏は「書評者が選ぶ'94『この3冊』」（『毎日新聞』，1994年12月13日）で、松本清張『両像・森鷗外』（文藝春秋，1994年）をあげ、次のように評している。

「松本清張さんの遺作は森鷗外の『渋江抽斎』『伊沢蘭軒』を論じて清新。謎ときの大家が謎ときの本を分析した。文章も、相手が相手だけにわりに入念に書いている。」

また、別の書評で森鷗外の史伝の筆法が「刑事の捜査ぶりを語りつづけた松本にとって、親愛なる先輩のように感じられたことだろう。」（『毎日新聞』，1994年12月5日）

また、今谷明氏は、同書を次のように評している。

「世の文学ファンには、漱石派と鷗外派の両派あるらしいが、著者のような社会派の推理作家、ことに徹底的にエリートを嫌悪し、下積み者の悲哀を描き続けた小説家が鷗外派であったとは意外な感がしないでもない。（中略）。エリートと見えた鷗外が、実は技術者ゆえに陸大出身の若い事務系高官に追い抜かれ、ついには願使（いし）にあまんぜざるを得ない下積みの悲哀者であったことだ。かく申す私自身が鷗外派でかつ外ならぬ清張ファンである理由もまた、脱落エリートの経験者であるせいかも知れない。」（『朝日新聞』，1994年12月18日）

丸谷才一書評は「『謎とき手法』伝記三篇を清張らしく探索」であり、今谷明書評は「『下積み者の悲哀』を温かいまなざしで」というタイトルが付いている。

私は、神辺に関心を抱き、菅茶山に注目する中で、北條霞亭に出くわした。鷗外の史伝三部作とは『澀江抽斎』『伊沢蘭軒』『北條霞亭』を指すが、前記二評者の文章は、清張書する「北條霞亭」には触れてはいない。

鷗外三部作で、北條霞亭、伊沢蘭軒と菅茶山、伊沢蘭軒と澀江抽斎との関係

を重視すれば、福山藩の文官、菅茶山・北條霞亭、医官、伊澤蘭軒からの鷗外三部作の読み方が浮かび上がって来る。鷗外史伝の読み方に、地方からの目加わるのである。

鷗外生地、島根県津和野町に1995年4月1日、森鷗外記念館が完成した。鷗外史伝三部作の解明が、鷗外理解の鍵であるとすれば、備後神辺だけではなく備後福山あるいは、広島県東部にも日本の文化、世界の文化への糸口がある。森鷗外は世界で最も注目される日本の作家の一人であるからである。